一人法燈の影に隱れて、自己の安逸と、利慾を逞うせんとして、濟むとおもつてゐるかと公憤してゐる人がある。

陶醉？　娯樂？

宗教は陶醉でも、娯樂でも、趣味でも、道樂でも、功利でも、逃避でも、獨斷でも、自慰でもない、斯くすれば斯くなるものと知りながら、止むに止まれぬ大和魂、即ち、法藏の願心に、もえて行くのであるといつた。

本心は目的の國に

カントは、プラトーと同じく、我々の本心は常に目的の國に進んでをる。即ち、その目的の國は、吾々の心のもち樣にて、直ちに現はれて來る。吾々の目的の國は、何であるかといふに、無限生命の國である。即ち、無量壽佛の國であると。

願生安樂

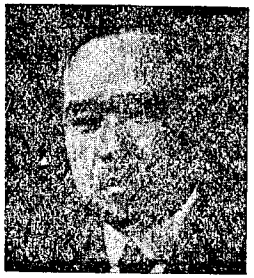
天親菩薩は、その著淨土論に、願生安樂國といつてゐる。願生は歸命である。歸命とは、雨降りに隱家を探る意味である。然るに吾人は、つまらぬ隱家斗り探るから駄目である。三界を勝過せる、安樂淨土の御國を願生せねばならぬ。

（安樂淨土の壯嚴は、惟佛與佛の知見なり、究竟せること虛空にして、廣大にして邊際なし）

花一輪も

花一輪から限りない光りを出してゐると、極樂の世界を、經に說いてゐられるが、『プラトー』は一輪の花は永遠の世界から生れてゐると、いつた樣に、死んでから斗りでない。この世からその趣味が味はれる。

一一のはなのなかよりは、三十六百千億の、光明てらしてほがらかに、いたらぬところはさらになし。
一一のはなのなかよりは、三十六百千億の、佛身もひかりもひとしくて、相好金山のごとくなり。



支那民間宗教

三階教と現代思想（一）

東大講師
文學博士
矢吹慶輝

■此の御講演は、東京本部十七日例會にして載いたのであります。元より文責は記者にあることですが、その筆記が雜駁で先生に對して、實に恐縮ですが、讀者諸氏に先月御期待の願つて置きましたので、今月之を載させて頂きました。此の點御承知の上御熱讀下さい（記者）

三階教とは、西洋紀元第六世紀の末、支那民間に起つた所の佛教である。

二十世紀の今日、一千年前の此の三階教の思想を捕へて來て、現代思想に言及する何物かゞあるか何うかを考へて見樣と思ふのである。

それに、先達て、先づ述べて置かねばならないことは三階教と云ふ字義に就てゞある。

佛教では正像末と云ふ言葉があるが、それは說明する迄もなく、正法、像法、末法であつて、正法を先づ第一階とし、第二階を像法、第三階を末法とする。此の第三階の末法觀の上に立つた所の佛教なるが故に、之を三階教と云ふのである。

■

正像末のことは後に之を述べるとして、今日ダーヴインの進化論や、マルクスの共產主義の思想を考へて見るに、其の傳播は、五十年か乃至六十年間に其の思想が殆んど全世界に流布されてゐる。如何にもそれはスピードの時代を思はせるものである。然るに、佛教は、印度から支那に渡る迄に約五百年を要し、支那から日本に渡るには又五百年ばかり經過してゐる。それは丁度、日本紀元の千二百十二年であるから、印度から支那朝鮮を經て日本に渡來する迄

には、悠に一千年の時日を要してゐる譯である。今此の兩者を比較して見ると、マルクスやダ　ヴインの其れと、佛教の其れとの間には著しい相違を見るのであるが、此れは、其の當時の交通の發達程度如何に依るものと思はれる。

三階教の起つたのは、佛教歴史の中間である。三階教は、當時の佛教に對して革命的思想を投げかけた。佛教の諸經に於いて佛は時と共に、次第に佛から衆生の問題を取扱ふ樣になつて來た。然るに三階教は反對に人間を本として、人間から佛を考へるのである。即ち佛を問題にしてゐた佛教に對して三階教は逆に人間の方から先に考へてそれに關係のある所の佛を考へるのである。

日本に入つた佛教も、佛から衆生へと云ふ傾向を持つて居たのであるが、後に至つて三階教と同じ傾向を持つ樣になつて來た。其の代表的なものは法然、親鸞、日蓮等であつて、人間を中心とした生きた佛教を取扱ふ樣になつたのである。

從來の樣に、單に佛が偉いと云ふ丈では駄目である。それは丁度銀行員が他人の金を數へるに等しいもので、何にも自分の爲にはならないことである。

支那に於ける三階教と、日本佛教の日蓮、親鸞等とは非常に一致して居る點を見る時、不思議でもあり、興味でもある。

三階教が佛教に與へた所の革命思想は何であるかと云ふと、其れは三階教の末法觀である。其の典據は、大集月藏分經であるが、親鸞も日蓮も此の經典に依つて生きた新しい宗教を生み出したのである。

從來印度に於ては、五百年を以て一期とするのであるが、佛滅後の二千五百年を五期に分けて、現代を末法と考へるのである。

勿論正、像、未、の說には、種々の異說があつて凡そ四說あるが、三階教は、當時を末法ときめた、然して、正法と云ふ時代はまあざつと、戒も見（認識）も其の正しきを得ると云ふ時代で、最も良い時である。次の像法の時代と云ふのは、それ等が、幾等か形式化されては來るが、未だ白法が保たれてゐる時なのである。末法と云ふ時代は、鬪諍堅固の時代であつて戒も行も行はれず、認識（見）も全く其の正しさを失ふと云ふ時代である。即ち戒、見、何れも行はれず、暗黑の世界で白法の去りゆく時代である。此の末法觀と、大集月藏分經とに依らなかつたならば三階教も日蓮も親鸞も起つては來なかつたのである。

又此の思想に立場をとつた爲に、日蓮、親鸞、法然はあれ程の激しい迫害を蒙つたのである。日蓮が單に法華經を尊崇したのみではあれ程の迫害は起らなかつたのであるが、末法觀の上に立ち革命的であつた爲に、非常な迫害を受けたのである。然らば、何物に依つて、此の暗黑な末法の世界に生きよと云ふか、三階教はこれに對して、何を與へるのであらうか。日本の佛教は別法と云つて、佛にのみ賴れと云ふのであるが、三階教は、普法と云つて、何ものでも役に立つものは、捨てるなと教へるのである。此れに依つても知られる如く三階教は人本的な立場に立つてゐるのである。これを佛教の專門的な言葉で云ふと、日本のそれを別願論と言ひ、三階教の持つ思想を總願論と云ふのである。三階教は斯る立場より佛を見るのであるから從つて從來とは餘程異つたものであることは云ふ迄もない。三階教から云へば、彌陀一佛へと云ふ如き見解は偏見であると排斥し、誰でも崇めよと云ふのである。何故かと云ふに三階教の立場から云へば、今日の如き末法の世に於ては、是こそは正しいと云ふが如きものはない。何故かならば、末法時代に於ては、認識の正しきを得ることが出來ないと說く三階教の當然の結論だからである。

一切衆生は、皆如來を藏してゐる。佛性論から云へば一切は佛である。三階教の信行禪師は當時長安の都を歩いてゐる街道の人を一人々々拜んでゐられたと言ふことである。これは常不輕菩薩の眞似をされたものである。斯る所から三階教は勢ひ山中に止まらずして、民間佛教となつた所以である。（つゞく）　（文責在記者小澤生）